

授業に「手びかえ」を生かす

て、学習者は読み進め、心を動かさ
れたり考えたりします。

しかし、それはあくまでも個の読みであり、教室では、他者の読みを取り入れて、自己の読みを拡充しなければなりません。他者の読みを取り入れるとは、同じ学びをしているメンバーとコミュニケーションを交わし、「交流」することを行います。そして、この「交流」が実は、自己の読みを確かめ豊かなものにするだけでなく読みの技、学びのテクニックを身につけることに結びつきます。こういう国語教室にしたいものです。

学習者は、学習目標を心にとめて文章を読みます。読みながら、「ん」「えっ?」「はあ!!」「そうかなあ?」などと反応しながら読んでいきます。この「ん」「えっ?」「はあ!!」「そうかなあ?」が、学びの第一歩、原点ですから、これを、どのように出させ、書きとめさせるかが問題です。

文章の読みは、一人一人です。だから、学習

者は相互に知ろうとして、「交流」するのです。「交流」は、話し合いの学習になります。互いに考えを述べ合うコミュニケーションの学習は、一つには、内容にかかわって読み深める学習、もう一つには、発表したり話し合ったり、「交流」のしかたを身につける学習という、二重構造をもっています。二つの学習目標と学習活動が用意されなければなりません。

具体化にあたっては、学習者一人一人の読みの個性がとらえられていることが必要です。つまり、「手びかえ」です。「手びかえ」が、学習者の読みを深めるために、どのような話し合いや発言をさせるかを決めるものになるのです。

「読み」の「交流」のための「手びかえ」

「交流」の学習には、準備が必要です。まず、学習者の読みの個性、考えの方向性、考える対象や内容などをとらえること、次に、それらをもとにした授業の構造化(「流し方」を図ること)です。

A 読み終わっての感想を書く。(従来でいう一次感想) 従来でいう一次感想にあたるものですが、次のような表れ方をするでしょうか、それをここにチェックし、名表、座席表に書きとめて、「手びかえ」にします。一次感想は、全部印刷して冊子にし、学習材にします。

- ・文章(作品)全体に及んで感想を書いている。
- ・文章の一部に触れて感想を書いている。
- ・書き手の思いや文章作成の意図にも触れている。
- ・物事を是非でとらえようとしている。
- ・マイナー思考、批判的思考がはたらいている。

B 文章に即して、自己の読み取りを記していく。傍線を施し、そこで考えたことを、文章に即して書き込みます。教科書の教材文を、そのままプリントして「書き込み用プリント」を作成し、傍線の種類や色など、学習者と指導者の間で約束事として決めて、書き込ませるようにならせます。

「書き込み用プリント」は、一枚のものにし、教科書のページ・行はそのまま残しておきます。「交流」するときは、「○○ページ 行目○○○○○○○○」に線を引きました。理由は、「……。」というように、発言させましょう。

- ・うんうん、なるほど(共感・同調・確認)
- ・えっ?へえ?(驚き・発見)
- ・いや、そうかなあ?(疑問・反発)
- ・違っ、わたしは……だ(批判・意見)

指導者の「手びかえ」は、学習者と同じ「書き込み用プリント」を使用し、学習者全員の反応を書き込んでマップにします。だれがどのようにこだわったか、どんな考えをもっているかがわかり、これをもとにした構造化(例えば発言計画、あるいは代表を選んで話し合いの題材に、だれとだれを組み合わせたグループ構成にするか、ディスカッションの計画など)をします。(本誌24ページ「資料 教師の手びかえ」参照)

このマップは、前時までの学習者の思考の軌跡ですが、「交流」することによって変容が生まれます。例えばこのマップを用いて、——を施した者を指名して——を施した箇所とその理由を発表させます。次に、同じ箇所に——を施しても、考えの違つ者を指名し、発言させます。さらに、同じところでも——を施した者、——を施した者と発言するうちに、新たな考えが生まれてくるのです。

「交流」後は、必ず自分の考えを書く場をもたせます。これは、振り返りでもあります。